

第19回ヘブンアーティスト審査会 審査講評

東京都が指定した公園などの場所でアーティストが音楽演奏やパフォーマンスを行えるライセンスを交付するための審査、「ヘブンアーティスト審査会」も今回で19回目を迎えました。

今回は、応募要項が公表された5月23日から6月20日の締切りの間に、パフォーマンス部門に159組、音楽部門に116組の合計275組の応募がありました。

7月下旬に行われた一次審査では、応募書類のDVDに収録された約5分間の各アーティストの活動の様子が分かる動画を審査委員が集まって視聴し、議論や感想を述べ合いながら、委員が魅力や独創性、将来性を感じ、観客を前にした実演を実際に見てみたいと評価したパフォーマンス部門42組、音楽部門19組の合計61組のアーティストを、一次審査通過者として選定しました。

二次審査は、一次審査通過アーティストに、実際に観客を前にしての制限時間約15分の公演を行ってもらい、その公演の様子を審査する、公開審査会として、9月17日から19日までの三日間、池袋にある東京芸術劇場の劇場前広場や劇場内のオープンスペース(雨天時)で行いました。

二次審査を通過した、最終合格者は、別紙のとおりとなりますが、三日間、実演を見た直後に行う審議の中では、審査委員から審査の基準や考え方の参考になるようなコメントが挙げられましたので、部門別にご紹介します。

まず、パフォーマンス部門において、合格点に達するようなアーティストの評価できる点として、以下のようなものがありました。

- これまで何度か審査で見てきたが、前回からの大きな工夫が見て取れ評価できる。
- 内容は決して派手ではなくどちらかというとオーソドックスだが、演者の人柄が見て取れる。そしてそれが魅力的にうつっている。
- とにかく楽しい。見ている人みんなが楽しい気持ちにさせてくれる。また、楽しませようとする心が見え好感が持てる。
- 小道具や衣装、メイクまで細やかに神経が行き届いており、ビジュアル的に魅せようという意識が感じとれる。
- あれもできる、これもできると喧伝するのではなく、真摯に一芸を磨き上げてきた姿勢が評価できる。
- 観客が自発的に拍手したくなるよう仕向けたり、観客も演者の一人として参加できるよう小道具を活用したり、観客とのコミュニケーションの取り方が長けている。
- 15分という時間を意識して演目の構成が考え抜かれている。
- 技のミスはあるが、難易度の高いものを折り込み、チャレンジしたが故のミスと分かり、そのリカバーも滑らかである
- 技の合間にもアクロバットな動きを取り入れるなど公演スペースを目いっぱい使い、空間全体を使

って見せようという意識がある

- 音楽の選曲が良い。技と音楽の組み合わせ方の新鮮さや斬新さを感じた。
 - 観客を沸かせる技を連続して繰り出し、テクニックがずば抜けていた。
 - 体の動きが良い、ダンスやパントマイムの素養や勉強のあとを感じさせる。
 - 不利な条件や予期せぬトラブルも自分の味やキャラクターで飲み込む力量がある。
- といったコメントがありました。

一方で、あと一步の所で届かなかったアーティストに対してや合格に達したアーティストでも改善点として、次のようなものがありました。

- いろいろとやっているがとびぬけたものがなく、インパクトや個性に欠ける印象を持ってしまう
 - トークが芸や技を壊してしまっている。誰かのどこかで聞いたことのあるようなパターン化したトークではなく、自分のキャラクターに合ったものを考えてほしい。
 - 演目に、外からの視線や客観性が足りていない。演出できる人の意見を取り入れたほうが良い。
 - 枝葉の部分かもしれないが、観客から見るところに演目に必要のない生活用品が見えてしまっていたり、見る側を意識しない神経が行き届いていないところがある。
 - 凡ミスや雑さが目立つ。また、そのミスに対するリカバーもない。
 - トークが多いのであれば、言葉と内容に磨きをかけるべき、それが難しいのであれば、あまりしゃべらないほうが良い。
 - 15分間の演目や構成をみて、実際の活動での基本単位になるであろう30分間の公演では、ショーが成立しなさそうな印象を受けた。
 - オリジナリティは評価できるが、技の基本や基礎が疎かになっているように見えると評価することは難しくなる。
 - トークで後ろ向きな発言があり、観客を前にしたパフォーマーの姿勢としては疑問が残る。
 - ネタがあまりにも安易すぎて、工夫がない。また雑にも映った。
 - アイディアはあるが、すべて未完成。また、練習不足を露呈していた。
 - 観客からどう見え、どう聞こえているか、またやろうとしている技は他のアーティストと比べてどれくらいレベルのモノなのか、客観的に見えていないところがある。
 - 長時間持たない演目なら、構成や演出でカバーして、見れるプログラムに仕上げしてほしい。
- といったコメントが上がりました。

音楽部門では、合格点に達するようなアーティストの評価できる点として、以下のようなものがありました。

- 日常的に身近な楽器を演奏していたが、工夫すればここまでできるというお手本を示されたようだった。
- 審査会当日は、音が抜ける屋外での公演であったが、その状況にあった適切な音量が考えられて

いた。

○自作の楽器を使って演奏していたが、オリジナリティや物珍しさだけではなく、聞いていて共感できるものがあった。また、技術的にもかなり高度なことを行っていた。

○アーティストが真面目に鍛錬や勉強に取り組んだあとが感じられた。素朴さや真面目さが伝わり、嫌みのない、慣れすぎている感じに好感が持てる。

○オリジナル曲を披露し、志の高さが伝わった。曲も違和感なく、流れもできていた。

○ただただ演奏することが喜びといった演奏家の鑑のような人柄に好感が持てた。

○曲間のMCもしっかりできていた。ショーとして見せる場合には重要な要素

○歌がとても良い、自分の歌として魅せることが出来ており、説得力があった。

○アンコールなど観客のリクエストにこたえる姿勢がよい。

○音楽性そのものより企画性の高さが評価できるポイント。結果として観客の反応がそれを示していたように思う。

といったコメントです。

一方で、あと一歩というアーティストに対してや合格に達したアーティストに対しても改善点として

○楽器のチューニングが狂ったまま演奏していた。楽器に対し無頓着なところが気になった。

○同じような趣味の仲間うちで聞かせる場面ではよいが、幅広い年齢層の一般的な人に聞かせるには、独善的なところがあるように感じた。

○他のアーティストが実演している際、態度やマナーに気になるところがあった。アーティストとしてリスペクトや神経が行き届いていないところに疑問を感じた。

○真面目さは伝わったが、アーティストであれば、トークではなく演奏で聞かせて観客に訴えるべき。

○夜の bar などではしみじみ聞くには良いが、昼の屋外で聞くのはどうか、演奏する場を選ばないと演奏が生きていこない、映えないという印象をもった。

○オリジナリティ、物珍しさはあるが、音楽として聞く楽しみが感じられなかった。ソロではなく、デュオで演奏するなど、演出的なものが必要ではないか。

○音楽は、演出しなくても伝える力がある人がいる一方で、演出の仕方でも伝える力が伸びる人がいる。演奏技術の高さは観客に直接伝えることが難しい要素だが、技巧で訴えるタイプのアーティストの場合、そこをどう工夫して見せるかが課題

○特定の人には受けが良いと思うが、一部のファンだけに向けたパフォーマンスには陥らない方がよい。

○同じ調子の曲調が多く、演奏にバリエーションが無いように感じた。違いが際立つような工夫の跡は感じられるが、もっと自己演出が必要。

○屋外では、演奏している自分に聞こえる音と、アンプを通して観客に聞こえている音の違いが際立つので、音響的に、外にどう聞こえているか、独りよがりにならないよう環境づくりを考える必要がある。

○あまり機材に頼りすぎず、純粋に演奏で聞かせるほうが、耳が行くし、訴えるものが強い。

というものがありません。

審査委員の審議の中では、技の高さや技巧を際立たせるために、また、観客にショーとして見せるために、いかにアーティスト自身で演出や構成が練られているかという視点が多く挙がりました。アーティスト自身が自分のパフォーマンスや音楽演奏を「客観的」に見ることができているかという視点です。演出家の視点で見た際に、15分間をどのように組み立て、演出・構成を練っているか。観客の視点で観た際に、観客が見る位置からどのようにビジュアル的に見られるか、また、聞こえるかというような外からの視点です。特に、パフォーマンスや音楽演奏の合間の「トーク」については、客観性の有無について、多くの指摘が挙がりました。中には、トーク内容や言葉に磨きをかけられないのであれば、無理にトークせずパフォーマンスや音楽演奏に集中するほうが良いという意見もありました。

客観性や演出面に話が及ぶ一方で、芸能の世界では逃れることのできない「キャラクターの魅力」についても評価できる大きな要素となりました。「明るさ」、「人柄の良さ」、「サービス精神」、「自然とにじみ出る生まれ持った魅力」「多少のミスも補って余りある魅力」など、必ずしも訓練で磨かれるものではありませんが、そういったところは、評価を左右する大きな要素にもなっているという話もありました。

また、同時に、演目の多様性や希少性も審査の視点で認められるべき価値であるという話もありました。見る人によって、好き嫌いの評価が分かれるものについては、それはヘブンアーティストの中にはあって良い。むしろそのような多様性を積極的に確保していくべきという考えもありました。好きならば、また、自分に合うならば、見る。嫌いならば、また、自分には合わないならば、立ち去る。それが大道芸の良さでもあるという意見もありました。

以上が、第19回ヘブンアーティスト審査会審議の中での意見をまとめた審査講評になります。これが、審査の基準がよく分からないというアーティストや、今後自分のどこを改善し、どこを伸ばせばよいか分からないというアーティストに対して、これまで見えていなかった視点を示す一助になれば幸いです。

この審査会を通じて、これからヘブンアーティストとして活動するスタート地点に立ったアーティスト、これからヘブンアーティストの審査を受けようとするアーティスト、全てのパフォーマンスアートや音楽演奏の道を志すアーティストに対し、少しでも才能を伸ばしてほしい、また、これまでの枠や殻から突き抜けてほしいというメッセージを込めています。

全てのアーティストに、さらなる飛躍を期待します。

ヘブンアーティスト審査会

審査委員長 森 直実

審査委員（パフォーマンス部門） 芦部 玲奈、田中 未知子、乗越 たかお

（音楽部門） 梶 奈生子、湯浅 学